

ナシヒメシンクイ情報第1号（モモ）

令和7年4月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

トラップによる誘殺数が多い地域があります。
幼虫による新梢の芯折れ被害に注意してください。

1 発生状況

県内各地に設置したフェロモントラップによるナシヒメシンクイの越冬世代成虫の誘殺数は、豊田市（モモほ場）と西尾市（ナシほ場）で平年と比較して多く、豊橋市（モモほ場）でやや多い状況です（図1）。また、長久手市では4月第2半旬に誘殺ピークを迎えています。

本種は、東海地方では年に4～5回発生するとされており、成虫誘殺数が多い地域では次世代以降の発生量も多くなることが予想されますので、特に注意が必要です。

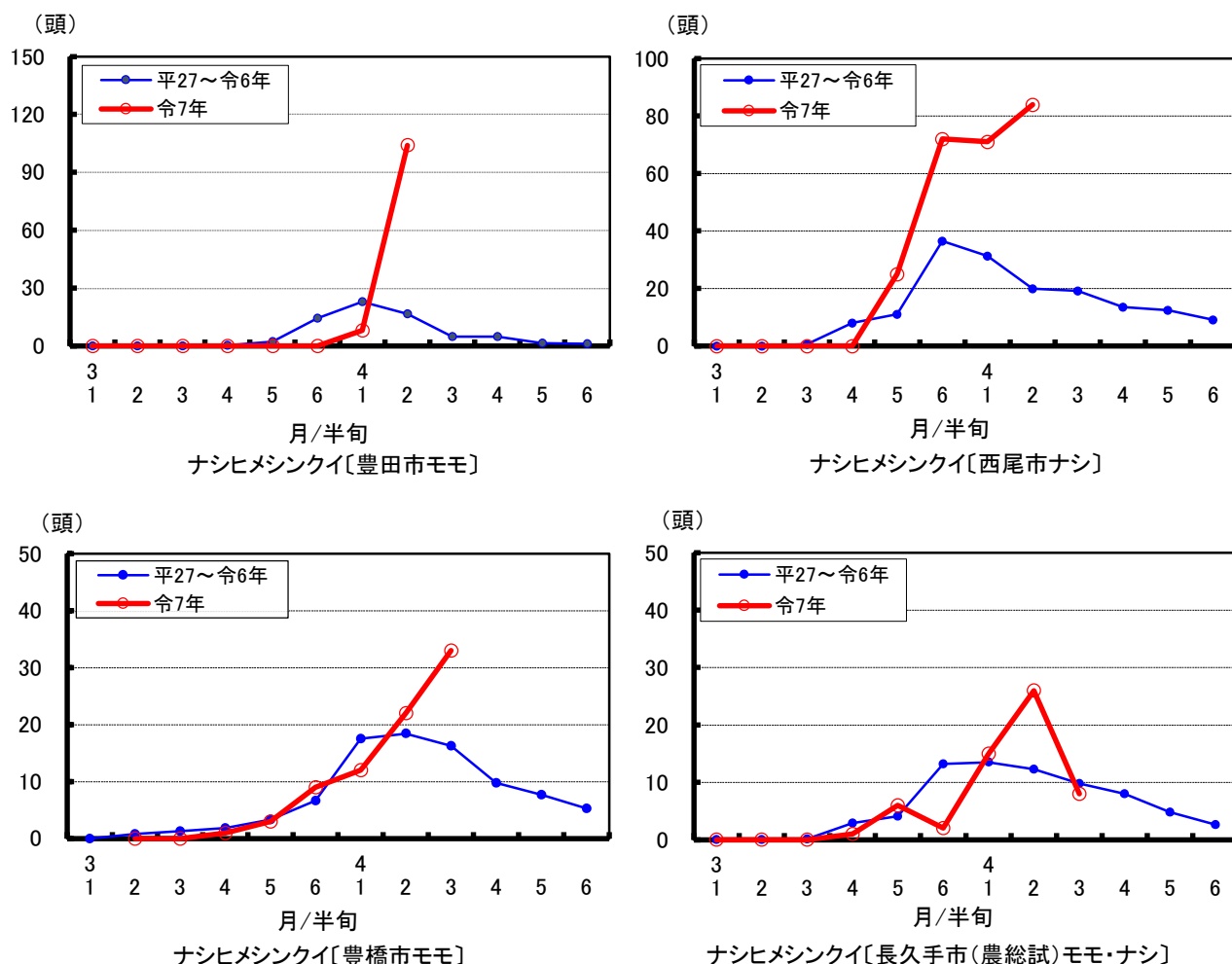


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイ成虫の誘殺状況

※トラップデータについてはあいち病害虫情報のウェブページに掲載しています。
(<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>)

2 ナシヒメシンクイについて

本種は、老齢幼虫が果樹の粗皮の割れ目等にまゆを作って越冬し、3月頃に蛹化が始まり、羽化した成虫はモモの新梢や葉裏に産卵します。

ふ化した幼虫は新梢先端に移動し、そこから食入することで「芯折れ」症状を引き起こします（図2）。

その後、世代を繰り返し、幼虫の寄生は果実へと及び、果実への食入による被害を引き起こします（図3）。



図2 新梢の芯折れ被害

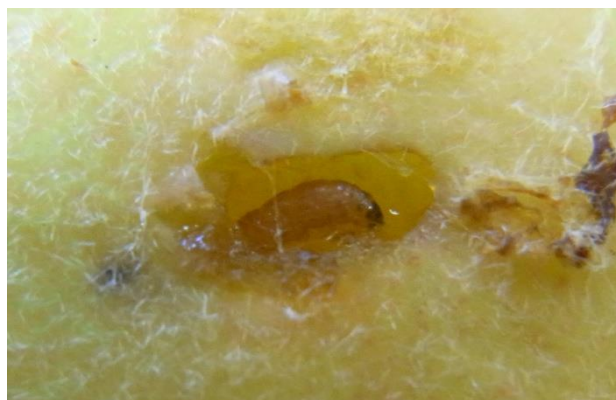


図3 果実を食害する幼虫

3 防除対策

幼虫が新梢へ食入すると薬剤の効果が低くなるので、防除適期は卵から幼虫がふ化するタイミングです。本年は長久手市を除いて現在までに誘殺ピークは見られていませんが、平年は4月第1半旬から第2半旬に誘殺ピークとなります。今の時期の気温では、成虫誘殺ピークから2～3週間後が幼虫のふ化ピークと予想されます。適期を逃さないように表を参考に防除しましょう。

表 もものシンクイムシ類に対する主な防除薬剤

農薬名	成分名	使用時期	本剤の使用回数	IRACコード
オリオン水和剤40	アラニカルブ	収穫14日前まで	2回以内	1A
スピノエースフロアブル	スピノサド	収穫3日前まで	3回以内	5
アグロスリン水和剤	シペルメトリン	収穫前日まで	5回以内	3A
バリアード顆粒水和剤	チアクロプリド	収穫前日まで	3回以内	4A
モスピラン顆粒水溶剤	アセタミプリド	収穫前日まで	3回以内	4A

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRACコードの詳細はhttps://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdfを参照する。

薬剤散布の際は、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。